

# 中国都市部のコンフリクト状態にある夫婦関係

于 建 明  
(人間発達科学専攻)

## 1. 研究の目的と背景

本稿の目的は、中国北京市に居住する中年期男女に対するインタビューデータに基づき、夫婦関係にコンフリクトをもたらす要因、及びその現状と背景につき考察することである。筆者はこれまで計34人の中年期男女を対象に夫婦関係に関するインタビュー調査を行ってきたが、その中で「離婚」を話題にした6人をここでの分析対象とする。彼らは夫婦関係に関する語りの中で、自ら「離婚」を話題にした。しかし、彼らは実際には夫婦関係を継続しており、離婚に踏み切っていない。彼らはなぜ離婚を考え、また結婚生活にとどまっているのか。そのライフコース上の特性を明らかにすることが本稿の中心的な課題となる。

中国社会では、特に80年代以降の改革開放政策、市場経済の導入以降、恋愛結婚が一般化し、夫婦関係が家族関係の中心とみなされるようになった。しかし、愛情重視の夫婦関係はおのずと離婚のリスクも高めるようになった。中国における離婚率は1978年の0.35%から1993年の1.54%、2001年の1.96%、2005年の2.73%<sup>1</sup> (中国人口年鑑, 2006) と上昇する一方である。また、晩婚化などの影響もあって、北京の結婚対数に対する離婚対数の比率は2006年に35.05%となった(張, 2008)。特に大都市では、30年前までの離婚がタブーであった社会風潮が一変した。2003年10月1日の新しい『婚姻登録条例』の実施により、離婚手続きが簡素化され、離婚届を提出するときに単位<sup>2</sup>の証明書が必要でなくなり、さらに協議離婚に対する1ヶ月の審査期間もなくなった。

こうした背景のもとで、中国の夫婦関係研究において、夫婦のコンフリクトへの関心が高まってきた。徐・叶(2002)は、ライフサイクルと夫婦のコンフリクト状態の関連に注目して、夫婦のコンフリクトの年齢分布、及びその主な原因について検証し、①現代中国の夫婦のコンフリクトの主な要因は、「家事」、「子どもの教育方法」、「経済」である、②夫婦のコンフリクトの発生率と結婚年数とは逆U字型の

関連を示す、③夫婦間の信頼、役割分担満足度、家事分担公平感は都市部の夫婦のコンフリクトを和らげる作用がある、④夫の社会階層が妻より高いことは夫婦のコンフリクトを和らげる作用がある、などの論点を指摘した。張(2006)はこれらの分析を踏まえて、質的な研究方法で夫と妻のお互いに対する役割期待のずれに注目して、夫婦のコンフリクト状態について分析した。そして、夫婦関係に男女平等を求める妻と、伝統的な家父長制規範を内面化した夫のお互いに対する役割期待のズレが、夫婦のコンフリクトの主な原因であることを明らかにした。しかし、現在の中国の夫婦関係は、伝統的な家父長制規範、男女平等意識のほかに、西洋的な「近代家族」の愛情規範、改革開放後に急速な強まりを見せている業績主義や個人主義的意識など、多様な社会意識と規範に影響されている。以上より本稿は、市場経済の導入がもたらした競争的な社会風潮、社会保障機能を兼有する単位制の崩れ、一人っ子政策の実施、強まってきた学歴主義などの社会変動、及び変容してきた離婚に対する意識、強まってきたプライバシー重視する意識、浸透してきた西洋的な「愛情」規範などの社会規範意識に注目しながら、コンフリクト状態にある夫婦関係の分析を試みる。

## 2. 調査概要と分析視点

### 1) 調査対象

筆者は2007年1月～2月、5月～6月、2008年1月、8月、11月の5回にわたり、北京市に在住する35-45歳と55-65歳の年齢層に属する34人の有配偶中年期男女を対象に調査を行った。この中で、特に離婚のことに触れた6人の男女の語りを分析の対象とする。

### 2) 調査方法と調査内容

半構造化質問紙にもとづくインタビューを行った。あらかじめ質問項目を設定したが、調査対象者にできるだけ自由に語ってもらうようにした。場所はAさん、Bさん、Dさん、Eさんは対象者の勤務先で、Cさん、Fさんは喫茶

店であった。全員一対一で、所要時間は平均して2時間前後、長い場合は3時間、短い場合は1時間程度であった。

共通する調査項目は家事分担の状況、情緒関係の状況及び夫婦関係に対する主観的認識などを中心とするが、特にコンフリクトの状態にあると述べた人に対しては、①現在のコンフリクトの状況、②コンフリクト状況に対する認識、③コンフリクトになったきっかけ、④離婚を考えたことがあるかどうか、⑤離婚に踏み切れなかった原因などを詳しく聞き取った。本稿では、これらのコンフリクトに関連した語りを分析していく。

### 3. 分析事例のプロフィール

分析事例概要：

Aさん：2年間の短期大学を卒業して、北京市公務員となった。仕事をしながら大学に2年間通って大卒の学歴となった。1997年に紹介で知り合い、付き合い始めてまだ3ヶ月の頃、夫の職場は既婚者を対象に住宅を分配することとなり、そのために3ヶ月の付き合いで結婚した。結婚してまもなく夫は香港に転勤し、2年間両地分居<sup>3</sup>をした。2001年に女の子が生まれ、男の子がほしかった夫は失望を隠せなかった。小さいときから肥満気味の娘に厳しかった夫と子どもの教育をめぐるよく意見が対立した。

Bさん：大学を卒業してから、内陸にある中小都市で中学校教師として勤めた。両親の夫婦関係に問題があって、両親は彼に早い結婚を望んでいた。当時まだ学生である女の子を愛していたが、結婚を急いでいたので、1990年に同僚で自分のことが好きだった現在の妻と2ヶ月の付き合いで結婚した。子供が生まれてから2年間東南沿海部の都市に「下海」<sup>4</sup>した。その後またもとの学校に戻り、2002年北京の高校に転職した。中等専門学校卒業の妻は結婚後、断続的に同じ省にある大都市の短大、さらに四年制大学に、また修士課程に進学した。2005年修士課程を修了し、北京のある短期大学の教師となった。夫婦はほとんど両地分居の生活をしてきた。

Cさん：農村出身で、沿岸部の大都市の大学に入学し、卒

業後北京の国有企業に就職した。現在建築関係の株式会社に勤めているが、2008年に自分の会社を興して現在の仕事をやめる予定である。今まで、国有企業、不動産会社、会計事務所、自分で起業するなど多様な職業キャリアを積んできた。有名大学を卒業した自分に自信がないわけではないが、これからの仕事はどうなるかなどは心配で、プレッシャーも大きい。妻、息子のほかに自分の両親を呼び寄せて同居している。妻は北京出身で国有企業で働いている。

Dさん：1986年に大学を卒業して、国家の配置で故郷に就職した。夫とは高校のクラスメートで、同じ都市の大学に進学したが、特に恋愛関係はなかった。大学進学が珍しい時代だったので、二人が結婚するのは当たり前のようにまわりに思われていた。1988年に夫と両地分居のままで結婚し、1994年娘が2歳のときに北京に来るまで離れ離れに生活をしてきた。一緒に生活するようになってから、夫婦の不一致が多いと感じた。北京では1回転職を経験し、その後仕事を辞めて、夫と外国に行った。戻ってから現在の仕事に就き、今の職場では契約社員のような立場で、将来の保障はない。

Eさん：19歳で高校を卒業して西部内陸にある軍隊に入った。軍隊での進学のタイミングなどを考慮して、結婚したほうがいいと思ったところ、紹介で妻と知り合って、1988年に結婚した。その後他の都市にある大学に進学し、2年間夫婦両地分居の生活を経験した。1994年に北京に転勤し、1人で上京した。2年後には妻も北京に来て、軍隊所属の病院に勤めた。2006年に軍隊での昇進はもう限界になっていると判断して、軍隊から転業<sup>5</sup>し北京市の公務員となった。家族全員が北京に移住してから夫婦関係が不仲になった。

Fさん：高校を卒業して、1967年に雲南省に下郷<sup>6</sup>された。1972年に北京に戻って中学校の教師となった。紹介で夫と知り合って、1974年に結婚し、結婚した当時は住宅がなかったので、夫の家族とちょっと同居していた。夫の家族のことが気に入らなくて、妊娠して両親とは別居した。子どもを有名大学に進学させ、1998年にはアメリカへ留学にさせた。普通の学校の教師は進学のプロ

表1 調査対象者基本属性

ケース	性別	年齢	配偶者年齢	学歴	職業	配偶者職業	家族構成
A	女	35歳	42歳	大卒(最終)	市公務員	国家公務員	夫、娘(7歳)
B	男	38歳	34歳	大卒	高校教師	短大教師	妻、娘(16歳)
C	男	38歳	34歳	大卒	株式会社	国有企業	妻、息子(4歳)、両親
D	女	43歳	42歳	大卒	国家機関非正規職員	国有企業	夫、娘(15歳)
E	男	45歳	42歳	短大(最終)	市公務員	医者	妻、娘(17歳)
F	女	61歳	65歳	高卒	企業所属専門学校定年	国有企業定年	夫、息子(34歳、離婚)

レッシャーなどもあって忙しいので、1987年に企業所属の専門学校に転職し、定年まで働いた。

#### 4. 事例分析

##### 1) コンフリクトのきっかけとその後の経緯

###### a きっかけとなった出来事の特徴

調査対象者が夫婦間のコンフリクトのきっかけとして挙げた出来事は、①自分や配偶者の浮気（C、F、A、B）、②家事分担をめぐる対立（F）、③子どもの教育（A、D）、④配偶者の職業上の業績に対する失望（A、E）、⑤両地分居の経験（D、E）、⑥価値意識や性格の不一致（A、C、E）などであった。一人が一つのきっかけを挙げている場合もあれば、複数の出来事を挙げる事例もある。後者の場合は、夫婦関係に不調をもたらした最初の出来事の影響やそれによって生じた夫婦の不仲が、次々に新たな問題を引き起こしていく様子が見てとれる。ただしこのような傾向は、調査対象者が、コンフリクト状態にある現在の地点に立って、過去の出来事との関連を語っているため必然的に生じたものだともいえ、ライフコース上の複数の出来事の中に因果関係があったと断定することはできない。

コンフリクトのきっかけとなる出来事が生じた時期は、結婚当初からのもの（A、B）がある一方で、6年前と相対的に最近生じたもの（C）まで多様であった。しかし、いずれの事例もいったんコンフリクト状態に陥ると、そこから抜け出すことが難しく、今日に至るまでコンフリクトを引きずっている点では共通している。別の見方をすれば、現在コンフリクトはないとして、ここでの分析対象としていない事例でも、長期にわたる結婚生活のなかで必ず一度や二度のコンフリクトを経験しているはずである。しかし、彼らは何らかの方法によりその状態から抜け出すことができたのに対し、これら6事例はうまく関係調整を図ることができなかつたともいえる。それゆえ、コンフリクト状態にある夫婦に関する考察は、当初のきっかけとなる出来事だけでなく、それへの対処のあり方を長期的に追っていく必要があるだろう。

以下では、まず、きっかけとなった主な出来事についてみていくことにしよう。

###### b 自分や配偶者の浮気

6人の中で、「浮気」をきっかけとして挙げたのはAさん、Bさん、Cさん、Fさんであった。Fさんは結婚18年ごろに夫の浮気を経験し、夫からの離婚したいという申し出に対して、「そんなことは認められない」と拒否した。彼女は「私はただの教師で、失うものはそんなにないけど、彼は職場ではリーダーで、そこで働き続けたいなら、その問

題をちゃんと処理しなければ……」と考え、夫にどうしても離婚したいなら、彼の「作風問題」を職場と上の紀律検査部分に告発すると言った。それで離婚は食い止められたが、「よく彼に言うんだけど、『(浮気を経験した) あなたは捨てられたゴミと同じ、私が拾ってあげたんで、じゃなければ今行くところもないだろう』って……」とその影響は今でも引きずっている。Cさんは結婚4年目ごろに愛人をつくって、その関係は6年間続けられたが、「奥さんと離婚して結婚しよう」と愛人に言われ、いろいろ考えた結果二ヶ月前に別れたという。Bさんは「下海」の間に知り合った女性と偶然再会して、肉体的な関係を持つようになり、離れ離れであり会えないが、ずっとその関係を保っている。Aさんは夫の携帯で微妙な関係を持っているだろうと思われる人からのメールを見た。

計画経済の下では、労働領域としての単位は個人の家内領域に侵入し、夫婦関係にも干渉してきた。特に不正な男女関係と関連する「生活作風」<sup>7</sup>は厳しく要求され、個人の昇進にも影響を与えるほどタブーとされてきた。しかし、市場経済の導入に伴って強められた私生活を重視する意識、また、生活領域と労働領域の物理的な分離などの影響で、「一夜情」、「情人」、「包二奶」<sup>8</sup>などのような現象は社会問題になるぐらい注目されている。今度の事例の中でもそういう傾向が反映された。また、配偶者の浮気に出会ったときの若い年齢層の反応と年齢層が上であるFさんの上記の反応との違いから社会意識の変化がうかがえる。

###### c 家事分担をめぐる対立

徐・叶（2002）は、その実証研究の結果、家事分担が夫婦間コンフリクトの3大要因の一つであるとしている。しかし今回の調査対象者のなかで、家事分担が単独でコンフリクトの最初のきっかけになったと述べた人はいなかった。これは、夫婦関係に生じるコンフリクトは、最初の要因の影響が継続するなかで新たな要因を生み出していくなど、継起的な過程があるためだと思われる。つまり、同じく「家事分担」であっても、それが直接コンフリクトの〈要因〉になる場合もあれば、何らかの要因により夫婦関係が不調であるがゆえに「家事分担」をめぐって衝突するなど〈結果〉となる場合もある。

例えば最年長のFさんの場合は、もともと夫の浮気に悩んでいたが、それに加えて家事分担に関する不満からいっそうコンフリクトが深刻化したという。彼女は教師として定年まで働き続けたが、仕事がどんなに忙しくとも、日常的な家事はほとんどすべてを引き受けてきた。夫は「同じように働いている（にもかかわらず）私が家事をするべきだと思って」おり、そのような夫に対する不満を募らせている。

## d 配偶者の職業上の業績に対する失望

現代の中国社会では、改革開放後の市場経済の導入に伴って競争的な風潮が強まり、人々の経済格差も拡大している。このような社会変動は、夫婦の関係性にも影響を与えずにはおかないだろう。Aさん、Eさんの語りから、夫に職業上の成功を期待している妻と、妻の期待に応えられない夫との間でコンフリクトが生じていることが確認された。

(夫は) 政府機関に勤めているのに、出世に淡白で、上司によく逆らうけど、掃除するおばさんには優しい。現実的ではないから、昇進もできない。【事例A】

(妻は) 文句が多くて、それに人を傷つける文句が多い。いつも他人と比べて、他人から見れば(中間管理層である自分は) いいほうだけど、彼女は満足できない性格で……【事例E】

このうちAさんは、結婚した当時から「基本的な人生観の違い」があり夫婦関係がうまくいかなかったとしているのに対し、Eさんは、1994年北京に来るまでは、夫婦関係はそれなりによかったと述べた。しかし、北京に来てからは、妻の周りに地位の高い夫をもつ人が多いために、Eさんに対する妻の不満が募っていったという。「経済」が夫婦のコンフリクトの要因の一つ(徐・叶, 2002)であると指摘されているように、夫と妻の相対的な経済力、社会階層意識が夫婦関係に大きな影響を与えると見えよう。そして、経済の自由化のなかで、競争的になった職場環境のもとで、より強いプレッシャーを感じているのは男性であることも推測される。

## e 一人っ子政策がもたらした教育ブーム

1978年に一人っ子政策が実施され、一人っ子たちは「小皇帝」といわれるぐらい一家の中心となったと同時に、親や祖父母の期待をも背負うようになった。特に生活水準の上昇に伴う経済的な余裕、激しさを増している競争的な社会背景の下で、学歴主義が強まってきた。子どもの教育をめぐる意見の食い違いがしばしば夫婦関係にマイナスの影響を与える。以下のAさんの語りからその傾向が読み取れる。

みんな自分の子どもが可愛いのに、彼はぜんぜん。よく殴ったりして。期待が高いからこそということはあるけれど、それは能力の問題でもあるので、現実的ではない期待を持って……私が子どもを守ったら夫婦喧嘩になるの。【事例A】

これは「子どもの教育方法」が現代中国夫婦のコンフリクトの3大要因の一つで、特に都市では一番の原因である(徐・叶, 2002)という研究結果とも一致している。Dさんは、子どもの高校進学で夫婦の対立が強くなり、夫婦関係が「冷え切った。そして今年は離婚すると決心した……住宅も探した」という。しかし、子どもが高校に入学してからは、夫婦げんかの必要性がなくなり、離婚の話も立ち消えになった。特に教育ブームの下では、子どもの教育期というライフステージでのコンフリクトが強まる可能性が考えられる。

## f 両地分居の経験

計画経済の下では、仕事も国から配分されたため、別の都市で離れ離れに生活する夫婦が多くあった。しかし、改革解放後は職業選択の自由度が高まったために強制的な両地分居がほとんど姿を消した一方で、勉学やキャリアのために自発的に一時期の別居を選ぶ夫婦が増えた。6事例の中で、夫婦両地分居を経験した人は4事例であった。Eさんは結婚後別の都市の大学に進学して妻と離れて生活する期間があったが、妻はEさんに対して完全な信頼ができなくて、よく電話をかけてきた。誰と一緒にいるのかなど一日に何度もかけてくることもあり、同僚の前で面子が立たないということでは、妻に対して不満であったが、一方ではそれを妻の愛情だと理解して夫婦関係に特に悪い影響を与えなかった。Eさんと対照的にDさんは、結婚当時から6年間夫婦両地分居し、娘が2歳の時に北京に転職してはじめて夫婦一緒に生活するようになった。それをきっかけに、離れ離れのときに感じなかった夫婦の不一致に強い失望感を覚えた。「もし同じところで長く恋愛したら、一定の摩擦や不一致を経て理解しあえたかもしれないし、できなければ別れたかもしれないけど」という語りから、長年の夫婦両地分居の経験は、結婚初期のお互いに馴れ合う機会を逃し、その後夫婦のコンフリクト状態の最も直接的な原因だと推測される。

事例Dと事例Eの分析から両地分居が夫婦関係に与える影響は両地分居のタイミングと関連すると考えられる。また、両地分居を経験するときの夫婦のコミュニケーションの状況、お互いに対する信頼、不正な男女関係があるかどうかなどによって影響も異なってくるだろう。

## g 価値意識における夫婦の不一致

社会の変動に伴う価値観の多様化や家族の個人化傾向のもとで、価値意識或いはライフスタイルの一致・不一致は夫婦関係の安定にとって重要になってきた。事例A、事例Eの語りからこのことを確認しよう。

生活は現実的なものなので、二人で心を合わせてこの家のことを一番大切にすべきじゃない？夫婦が打ち解けて、子どもが順調に育つのが何よりだと思う。社会に対する責任感やほとんど関係ない親戚などのことを気にするのは余裕があればの話だと思うけど。【事例A】

現代では、個人の成長、経験の違いによって夫婦間で世界観が違ってくるよ。40代半ばになると男性は最も成熟して業績を出せる時期だけど、女性はね、狭い目で社会を見て、夫の考え方はついていけない。夫婦の心もだんだん離れていくんじゃないかな。【事例E】

また事例Cは妻に対し、「深いレベルのコミュニケーションはほとんどない。彼女は伝統的な家庭で育てられて理想や向上心などはまったくなくて……新しい観念は全然なくて、思想は束縛されていると思う」と批判的に語っていた。価値意識における夫婦の不一致は夫婦のコミュニケーションを妨げることを通して夫婦関係に影響を与えていることがうかがえる。日本のように性別役割分業がより強固な文化であれば、夫と妻はそれぞれ「外」と「内」という自分の領域を持って、お互いに干渉せずすむ。しかし中国では、家内領域においても公共領域においても男女が共同的に参加するため、そこで夫婦間の不一致が生じると夫婦関係に与える影響はより大きいものと思われる。

## 2) コンフリクト回避の技法

### a コンフリクトの修復と回避

5-1) でも述べたように、長期にわたる結婚生活のなかでは、夫婦関係にコンフリクトが生じることは避けられない。そのような場合、まず多くの夫婦は一定期間の対立の後に関係修復の努力を始めると思われる。Belsky and Kelly (1994;1995) によれば、夫婦の不一致に対する態度、いわゆる摩擦管理方式は「建設的なけんか」、「破壊的なけんか」、「回避」の3タイプがある。その中で、夫婦関係の修復には「建設的なけんか」が最も有効な方式であるが、しかし、分析対象の6事例はすでにコンフリクトが長期化・深刻化した事例であり、現状ではコンフリクト状態からの修復や問題解決を図るというより、コンフリクトがあることを前提にして、しかしその状態から日常的なぶつかり合いが生じないように回避する技法を編み出していた。その代表的なものが「コミュニケーションの回避」と「調整手段としての家事分担である」。

### b コミュニケーションを回避する

あらゆる人間関係にはコミュニケーションが基本となり、とりわけ日常的に生活を共にする夫婦のコミュニケーションは重要である。しかし、コンフリクト状態にある夫

婦の場合、そのコミュニケーションにはどのような特徴がみられるのだろうか。6事例の中で、Cさんは「(妻は)学識のレベルが低いので、深いレベルのコミュニケーションはほとんどできない」と、したくてもできない状態であることを強調した。それ以外の事例は、夫婦の不一致を直視しようとせず、意識的に夫婦のコミュニケーションを避けている。その中でFさんは、自分ではなく、夫がコミュニケーションを回避していると述べている。また、Dさんは、北京で夫と一緒に生活を始めたときに感じた夫に対する違和感について「言葉遣い、私は彼を傷つけると同時に、彼も私を傷つける。このようなことが繰り返されると神経が麻痺してしまう」と語った。この語りから、現在の「回避」的な状態になるまでに、Belsky and Kelly (1994;1995) のいう「破壊的なけんか」の段階を経験したことがうかがえる。以下のBさん、Dさん、Eさんの語りからその回避的な態度がよく分かる。特にEさんの語りから、コミュニケーションの回避を通してコンフリクトを回避しようという意志が読み取れる。

ちょっとしゃべってあげたら、彼女はとても私のことを愛しているような感じになって。耐えられない。学校に用事がなくても帰らないようしている。……いつか別れるかもしれないので、彼女に希望を与えたくない。【事例B】

もっとも耐えられないのはコミュニケーションがないこと。その冷たい空気は息苦しい。でも、もうコミュニケーションで関係を改善したりしたくない、改善しようと思わない、失望か、絶望か……【事例D】

毎日家に帰ったらすぐ台所に入る。(妻に)うるさくいわれる口実を与えたくないから、会話せずに済むから……面倒だからできるだけ黙っている。【事例E】

(Belsky and Kelly, 1994;1995) によれば、「けんかを避ける人は、破壊的なけんかをするととは別の、もっと大きな危険を抱えている。つまり、けんかを避けるのは感情的に結婚を放棄している証拠だと相手に受け取られかねないのだ」。以上の事例分析から結婚を感情的に放棄している人はけんかを避けるという「摩擦管理」の手段をとる傾向があると言える。

### c 調整手段としての家事分担

「家事分担」は現代中国の夫婦間コンフリクトの主な原因であるといわれている(徐・叶, 2002)。夫婦共働きがあたりまえの中国では、家事分担における夫と妻の平等性は比較的高いため、その衡平性が保たれないことが夫婦のコンフリクトの原因になり、コンフリクト状態にある夫婦

はいっそう家事分担における衡平性を求めると考えられる。しかし、6事例の中で家事分担がコンフリクトの一因である夫婦は年齢層が上であるFさんだけであった。

(もともと幹部である)彼は地位はそんなに高くないけど、同じように働いている私が家事をするべきだと思っている。【事例F】

一方で、家事分担の衡平性が保たれていないと思われるAさん、Eさんの2人の語りからは、家事を多く分担することが夫婦間コンフリクトの調節手段にされていることがわかる。

毎日家に帰ったらすぐ台所に入る。(妻に)うるさくいわれる口実を与えたくないから、会話せずに済むから……(家事を)やるのが問題じゃないよ。家族の人数も少ないし、材料を買ってきて調理すれば、それは簡単なことだし……【事例E】

彼に対して何も要求しないように……家事も子どもの教育も全部自分で引き受けるようにしたの。彼はもう何かを言う余地がなくなった。こうするようになってから、気持ちが楽になったの。かかわる必要性が少なくなって、疲れる部分もあるけど、それは肉体的なもので、心理的には楽になった。【事例A】

また、この2事例と違って、事例Bはコンフリクトの状態を維持する意味で家事分担を調節手段にしている。

率直に言えば彼女を愛していない。家事をやって彼女を喜ばせたりしたくない。彼女を愛していると誤解されたくない……【事例B】

一方、家事分担が夫婦間コンフリクトの一因であったFさんは、「今はね……家事が好きでなければ、『お願いします』といってくればね。でも、彼はそれもいえないんだよ」と現在の心境を語っている。Fさんの語りからはむしろ家事分担を夫婦関係を修復する調節手段にしたいという気持ちもうかがえる。

## 2) 離婚に踏み切れなかった理由

### a 離婚に対する意識

前述したように、分析対象の6事例の夫婦関係は、期間の長短はあれ、きっかけとなった出来事を経験して以降、一貫してコンフリクト状態にあった。その期間は、長いもので17年に及ぶ。当然その間に、関係修復の努力だけでなく、「離婚」という最終手段を考えた人もいる。しかし

彼らは、実際には離婚には至っておらず、その内実はどうであれ結婚生活を続けている。

この点について、Bさんは次のように述べている。「結婚した当時からこういう状態なので、いずれは離婚すると結婚した当時から思っていた。もう十何年間も経ったのに、まだ離婚していないのは自分でも不思議に思う」。離婚を考えながら、実際には踏み切れなかった6事例に共通する原因は、Dさんの語りに代表される離婚に対する心理的抵抗感であった。

離婚は受け入れられない、子どもがなくても受け入れられないわ。これは私の小さいときの生活環境と関連するけれど、私の道徳感と合わないの。(離婚したら)親戚や友達に合わせる顔がない。離婚した人はみんな悪い人というイメージで……私の意識は現在の都市文化にはなじまないけど、普通の農村の人とも違う。【事例D】

離婚率が上昇し、社会が離婚に対する意識が寛容になったといえ、Dさんの語りから、離婚を罪悪視したり、恥ずかしいと思う意識が都市と農村で異なるのではないかと推察される。したがって、農村出身で都市で生活するようになった人は都市と農村の二つのカルチャーのジレンマを経験する。都市の夫婦関係を研究するときで出身地の違いに配慮すべきことを示唆した一例である。

以上のような、離婚に対する一般的な意識に加えて、Aさん、Bさん、Dさん、Eさんは離婚に踏み切れなかった理由として、①家族、特に子供への悪い影響、②個人の社会的評価の低下、③将来の生活に対する心配、などを挙げた。以下では、これら3つの要因について分析する。

### b 家族、特に子供への悪い影響

現代中国都市では、近代家族規範の浸透に一人っ子政策が拍車をかけて、「子ども中心主義」(落合, 1994)が強化されてきた。4事例とも子どもに与える悪い影響を離婚に踏み切れなかった要因として言及した点で共通していた。

さらにBさん、Cさん、Dさんは親にショックを与えることを懸念していた。調査対象者の親世代にとって離婚に対する心理的抵抗感はいっそう強いであろうし、調査対象者にとっても親孝行の規範は強く内面化しており、離婚のような人生における重要な選択をするときに親はいまだ大きな影響力を持っていることもうかがえる。

責任かな?子供に対する責任、親に対する責任。周囲の人のことを考えなければ、(離婚は)簡単なことだけど、特に子どもに悪い影響を与えるので……特に女の子。親もみんな年を取っているし、このショックには耐えられ

ないだろう。【事例B】

家族に対する心配、特に子どもだよ。娘は見かけは大雑把だけど、実は繊細で……でも決心できたのは、別れたらもちろん傷つくけど、不和の家庭にいるのもよくないと思うようになったから。もう一つの心配は両親のこと。年を取ったし、五人きょうだいの中で私だけが北京に来ているの。私の離婚は両親に特に大きな影響を与えらると思うので。【事例D】

#### c 個人の社会的評価の低下

前述したように、現代の中国都市部では市場経済の導入に伴って社会全体が競争的となり、格差も拡大してきた。そのような環境のもとで、「離婚」という選択は、個人に対する社会的評価の低下を招き、それは単に世間の目というだけにとどまらず、職業キャリア上の成功の阻害要因ともなる。「私にとって、離婚のコストは高すぎる。やっと北京にこられて……もう一度最初からやり直す自信がない……」(Cさん)という語りに、このことが象徴されている。

#### d 将来の生活に対する心配

市場経済の導入に伴って旧来の社会福祉機能を兼有する単位制が壊れ、人々の生活保障は社区という地域組織へ社会化せざる得なくなった。しかし、現状ではなお新しい福祉システムは整備されておらず、多くの生活保障機能は家庭に頼らざるを得ない。「私が(大学を)卒業したとき、仕事はまだ配置で、社会がこんなに変化しなければ、就職した後は段取りよく安定的な生活をしていけたと思う。たとえ大きな業績を上げることができなくても、将来に対する心配もなかった……」(Dさん)という語りから、この変化が人々の人生設計に与えた影響が読み取れる。Dさんは「現実的な問題は住宅なの、今住んでいるのは彼の職場が配給したもので、(離婚するかどうかで)すごく迷っているとき、一番の心配は物質的な面で」と述べ、将来に対する生活不安が離婚に踏み切れない原因であると語っていた。

### 5. 考察：

本稿では、中国北京市に在住する6人の中年男女の語りをもとに、夫婦関係にコンフリクトをもたらす要因、及びその現状と背景につき、「コンフリクトのきっかけとその後の経緯」「コンフリクト回避の技法」「離婚に踏み切れなかった理由」の3側面を中心に考察した。

本稿の主な知見は、以下の3点にまとめられる。

第1に、夫婦関係にコンフリクト状態をもたらす要因は個別的多様であるが、一方で、現代の中国中年期世代が歩

んできたライフコース的背景と密接に関連する要因を見出すことができた。

改革開放の後、特に市場経済の導入に伴って、経済の格差が拡大し、競争的な社会風潮が強化されてきた。その影響で、人々は競争力を上げるために、キャリアを追求し、時には家族との時間を犠牲にしなければならないようになった。その結果、夫婦両地分居を経験した人は少なくない。徐・叶(2002)の夫婦間の信頼が都市部の夫婦のコンフリクトを和らげる作用があるという研究結果からも読み取れるように、両地分居のときに配偶者に対する信頼感が持てない場合、それは夫婦関係にマイナスな影響を与えることは事例Eで確認された。キャリア追求を目標にしても、思うとおりにいかない、特に配偶者の期待に応えられない場合、夫婦のコンフリクトの一因になることが2つの事例で確認された。またこういう競争的な雰囲気の中、子どもも期待を託される対象となって、子どもの教育をめぐって夫婦が対立しコンフリクトを生じさせることもよくある。

以上のような社会変動と直接的に関連している要因のほかに、社会規範の変化を介して夫婦関係に影響を与えている要因も確認された。プライバシーの尊重により、婚姻外の性的関係に対して社会が寛容になった結果、浮気が多くなり、夫婦関係に悪い影響を与えることが確認された。また、妻と夫が相矛盾する規範、例えば事例Fでは、妻は男女平等意識、夫は伝統的な家父長制規範、を内面化する場合、家事分担をめぐって夫婦が対立するようになった。一方、一人の個人が複数の相矛盾する意識、規範を内面化する場合、それも夫婦間コンフリクトの原因になる。例えば、Fさんは男女平等意識を内面化した一方で、夫にリーダーシップを求め、その期待が応えられないことが夫婦関係に悪い影響を与えた。もう一つ、「社会はこんなに開放的になってなければ、私も彼も離婚はこんなに簡単なことだと思わなかったし、つらくても離婚までは考えなかったと思う」(Dさん)という語りから、離婚に対する寛容になった意識はコンフリクトにある夫婦関係の解体を促進し、離婚率の上昇に直接影響を与えらる。と考えられる。

第2に、夫婦関係における深刻なコンフリクトは、さまざまな出来事の継起(sequence)を含む長期的な過程であることが確認できた。

例えば、「家事分担をめぐるとの対立」を夫婦間コンフリクトの一因として上げたFさんは、実は夫の浮気を経験し、この状況から見れば、家事分担をめぐるとの夫婦の対立は原因なのか、結果なのかが判断しにくい。また、離婚の申し出が認められなかったFさんの夫は、その後「隠せないようにならなければ絶対話さない。一所懸命動めなければ(一緒に遊びに行くとか)行かない」と「破壊的なけんかをす

る人とは別の、もっと大きな危険を抱えている」「回避」の「摩擦管理方式」(Belsky and Kelly, 1994; 1995) を取るようになって、さらに夫婦関係に悪い影響を与えたとと思われる。このようにさまざまな出来事が継起するプロセスが夫婦関係をコンフリクト状態に導いたといえるだろう。

第3に、現代中国の都市部において離婚がしだいに一般化しつつあるとはいえ、なお、それは当事者の心理的抵抗感も大きく、社会的にも不利益をこうむりやすい選択であることが確認された。特にここでジェンダーの視点でみれば、労働環境が競争的になってきた背景の下で、現在の中国の都市部では「2割前後のいわゆる専業主婦の存在が推測され」る(熊谷, 2004) という結果を参考にすれば、女性が労働市場で周辺化されていく傾向が懸念される。その結果、福祉システムが整備されていないなか、福利厚生において女性は男性より家庭に頼るようになり、この状況は離婚に直面するときの女性の選択の阻害要因になると懸念される。

最後に、本稿は学歴が比較的高く、職業もホワイトカラーである属性が偏っている6人だけのインタビューを分析対象としているので、結論は推測の域を出ないが、今後は更なる調査に基づいて本稿で得られた知見を再検討し、結論の精緻化を図って研究を進めていきたいと思う。また、とくに離婚に踏み切れない理由については実際に離婚に踏み切ったケースとの比較が必要だと思われるので、この点も今後の課題とさせてもらう。

(注)

- 1 1000人の人口に対する離婚人口の比率

- 2 社会保障機能を兼有する職場
- 3 夫婦はそれぞれ違う都市で離れ離れに生活することを指す。80年代中期までは戸籍などの関係でやむを得ずそうする夫婦がほとんどである。近年勉強や職業のために自主的に一時期離れて生活する夫婦が増えた。
- 4 もとの職場をやめて商売を始めること。
- 5 軍人が国家の配置で再就職すること
- 6 文化大革命のときに知識青年を農村に行かせること
- 7 男女関係など風紀の乱れ
- 8 「一夜情」特に愛するとかの感情を持っていない人と一回だけの身体関係を持つこと。  
「情人」愛人を作ること。  
「二奶」妻以外の妻扱いをする女性を作ること。

(文献)

Belsky J., Kelly J., 1994, *The Transition to Parenthood*, Delacorte Press (安次嶺佳子訳, 1995, 『子どもを持つと夫婦に何が起るか』, 草思社) .

熊谷苑子, 2004, 「性別家事分担の地域比較」, 石原邦雄編『現代中国家族の変容と適応戦略』, ナカニシヤ出版, 76-94.

長津美代子, 2007, 『中年期における夫婦関係の研究: 個人化・個別化・統合の視点から』, 日本評論社.

落合恵美子, 1994, 『21世紀家族へ: 家族の戦後体制の見かた・超えかた』, ゆうひかく選書, 94-110.

王金玲, 2005, 『女性社会学』, 高等教育出版社, 31-34.

首藤明和, 2008, 「現代中国家族をどう捉えるか」, 首藤明和・落合恵美子・小林一穂編著『分岐する現代中国家族』, 明石書店

徐安琪・叶文振, 2002, 「家庭生命周期和夫妻冲突的经验研究」, 『中国人口科学』2002年第3期.

张李奎, 2006, 『角色期望的错位——婚姻冲突与两性关系』, 中国社会科学出版社.

張翼, 2008, 『中国当前的婚姻态势及其变化趋势』, 河北学刊, 2008年第3期.

中国人口年鉴2006, 中国社会科学院人口与劳动经济研究所, 『中国人口年鉴』杂志社, 566.



# The Relationships of Couples in Conflict of an Urban Region in Contemporary China

Jian-ming YU

(Human Developmental Sciences)

This paper analyzed the contents obtained from five interviewees selected from the writer's investigation interview with someone who have once intended to divorce, but their marital status are still maintained with multifarious conflicts. Through analysis, the thesis has proved that the conflictive marital status have closely relations with Chinese social profound transformation with the consequent changes of social ideologies and social norms in recent tens years. The reasons causing marital conflict mainly include: social background complicated by social norms, the difference between the families and between the spouses with the consequent development of market economics, the difference of educational ideas to children between the spouses under the social background of craze of education for children, and couple separation required due to occupational planning under the background of social tremendous pressure, Generosity to sexuality outside marriage according to consideration that values privacy, collision over the housework division between the wife who requests equality of the sexes and the husband who makes a traditional standard inside, experience of living in different city of husband and wife, etc. The main reasons giving up divorce and keeping the marriage in the face of the choose of divorce mainly include: the social norms of repelling divorce accepted from traditional ideas, the worries about children and parents, enhancing familial social security function under imperfect social welfare policy, etc. In addition, it is understood that there are chiefly two techniques of the conflict evasion from the analysis. One is to evade married couple's communications. According to Belsky and Kelly(1994;1995 ), the minus influence to marital relations is given as this technique is opposite. Another one is to assume the housework division to be an adjustment means.

**Keywords:** conflict, social norms, transformation, market economics, interview